阿蘇神社：下宮と上宮

同一の目的を持つ二社

阿蘇神社は紀元前 281 年に創建されたと考えられています。阿蘇神社は二つの異なる場所にある二社から成ります。下宮（the lower shrine）はカルデラ底に広がる阿蘇市にあり、阿蘇山上神社（文字通り、「阿蘇山の上の神社」という意味）という正式名称を持つ上宮（the upper shrine）は、阿蘇山頂付近、噴火口からほんの百メートルちょっと下方に鎮座しています。二社はどちらも阿蘇山火口を御神体としています。

下宮には 1830 年代から 40 年代にかけて建てられた保存状態良好な建物が多数あり、そのうちのいくつかは重要文化財に指定されています。上宮はその少し後、19 世紀の終わり頃、明治政府が強制的に神仏を分離し、火口付近にあった火山信仰を行っていたいくつかの仏教寺院が廃寺となった際に建立されました。現在の上宮は 1958 年建造のコンクリート造りの簡素な一棟の建物です。

火山信仰の目的は、火山の中に宿る神々をなだめることでした。神々が十分に尊敬されていると感じ満足している限り、火山は休止状態を続けますが、もし神々が怒れば火山は噴火します。たとえ小規模であっても、火山の噴火は農作物や家畜、人間の住居に噴煙や火山灰の被害という大きな影響をもたらしました。

阿蘇山の火山信仰についての最初の記述は、581 年から 618 年まで中国を支配した隋王朝の正史『隋書』（636 年成立）に見られます。さらに、『日本書紀』など 8、9 世紀の日本の歴史書には、阿蘇山が神聖と見做されるようになった経緯が言及されています。

権力の中枢であった京都からほぼ 500km も離れた地方の神社が、なぜ外国にまでも注目されたのでしょうか。阿蘇の火山の挙動は、阿蘇地域だけでなく、日本全体の運命に悪影響を及ぼすと信じられていました。阿蘇神社の神職たちは、火口底の水（神霊池）の状態を監視し、その色や水位、様子（勢いよく泡立つなど）に変化があれば、京都の朝廷に報告しました。水が不吉な様子を見せているとみなされた場合、朝廷は阿蘇山の噴火とその噴火が予兆する国全体の災いを防ぐために、全国の神社に熱心に祈祷するよう命じました。